



HONEY CHIL'

ハニーチャイル

ジョン・シーランド

村瀬葉子・加藤暁子 訳



ハニー チャイル HONEY CHIL'

ジョン・シーランド
村瀬葉子・加藤暁子 訳

～Contents～

- 1 ごほうび …p.1
- 2 ほら、君にプレゼントだよ！ …p.6
- 3 口先だけ …p.13
- 4 喧嘩 …p.20
- 5 ハニー・チャイル …p.26
- 6 石投げ …p.36
- 7 ジョージおじさん …p.47
- 8 坑道 …p.58
- 9 風変わったな婦人 …p.67
- 10 ロニー …p.75
- 11 ヴァニティー …p.88
- 12 G夫人 …p.96

1 ごほうび

母さんがうつむいて、流し台の方に身を乗り出している。袖をまくり上げ、何か洗っているのだ。みんなはまだ起きてこない。毛布にしっかりとくるまったままだ。父さんはどこだろう。僕は毛布をはねのけると、ベッドからすりと出た。スニーカーがちょっと湿っていて、足を入れるとひんやりする。母さんの後ろに立ってじっと見つめて待っている僕に母さんは気づいてくれなかった。僕はくるっと向きを変えると、テントの足場からぴょんと地面に飛び降りて、しばらくそこに立ったまま、眠気を覚まそうと目をこすった。

僕は何も考えずに、池に向かって歩き始めた。時々足音に驚いたカエルが、ぴょんと道の脇に逃げた。臆病なやつ！ こんな早い時間でも、もうあちこちにバッタがたくさんいる。まだちっちゃなものもいれば、中にはクモみたいに長い足の生えた、大きくて青々したものもある。細い葉の上に乗ったバッタが、触角を上下にゆらゆら揺らしている。まるで挨拶を交わしているみたいだ。何度か捕まえてやろうとしたけれど、その度にブン！と羽音をたてて飛んでいってしまった。

船着き場まで来ると、僕は忍び足になって、できるだけ音をたてないように、静かに先端の方に近づいていった。一番端まで来ると、しゃがみ込んでゆっくりと下をのぞき込んだ。ブルーギルが2、3匹、水の中でじっとしているのが見える。船着き場の影になったそんなに遠くない所で、水面に波紋を描いている。素早く手を伸ばし

たら、捕まえられるだろうか。

ちょうどその時、背後から呼び声がした。「ジャッキー！ 朝ご飯よ！」

僕は急いで船着き場を走って引き返し、レベッカの立っている所まで来た。レベッカが僕の手を取り、僕らは二人で一緒にテントに戻った。

母さんは用意万端ととのえていた。摘みたてのブルーベリーが入った大きくてカラフルな器が、テーブルの真ん中にどんと置かれていた。僕はポリッジを少し取ると、その上にブルーベリーを載せ、ミルクと砂糖をかけた。父さんは大きくて節くれだった手でカップをぐっと握りしめて、時々コーヒーをすすっていた。熱いコーヒーから、湯気が細く立ち昇っている。父さんは爪を切ったり、スーツと歯の隙間から息を吸い込んだり、何気なく森を眺めたり、池のほうを見下ろしたりしていた。しばらくしてから、父さんは僕の大好きな、低くゆったりとした声でこう言った。

「なあ、お前たち！ 今朝父さんは、材木を取りに行かなくちゃならないんだ。どうだ？ 二人とも一緒に乗っていくか？」

「もちろんだよ、父さん！」と僕は答えた。「二人で行くよ！」

「よしきた！ じゃあ、母さんの皿洗いを手伝ったら、一緒に連れて行ってやろう。片付けが終わったら、すぐ出発だ！」

僕らは車で田舎道を走った。30分くらいすると、父さんは道路脇に車を止めた。切り出したばかりの材木がたくさん並んだ作業場の奥の方に、小さな小屋が一つ建っていた。父さんがちょっと出かけてくると言うので、僕らは車の周りを少し見て回ることにした。

何分かそうしているうちに、レベッカがいいことを思いついた。「ねえ！ 父さんが木を取ってくる間、鬼ごっこして遊ばない？ 最初はジャッキーが鬼よ。私を捕まえて体に触ったら、今度は私が鬼になるの。分かった？」

「うん」と僕は答えた。「分かったよ。」

レベッカはいきなり駆け出すと、地面から2、3メートルの高さに山積みされた、材木の山の上を走って逃げた。材木はすでに平らに切断されていたので、その上を走るのは楽だった。レベッカが合図すると、僕も駆け出し、捕まえてやろうと必死になって走った。しばらくして、あと数メートルで追いつくという時に、レベッカはスピードを落としてから、ぴょんとジャンプした。僕も急いでその場所まで走ってきたけれど、材木の間に隙間があるのを見て立ち止まった。

「ほら！」レベッカが、向こう側から手招きをしながら言った。「怖くないわよ！ 簡単だから！」

僕は2、3歩後ずさりしてから、思いっきり助走をつけてジャンプした。その後はあつと言う間の出来事だったから、詳しいことは覚えていない。ただ記憶にあるのは、僕のジャンプは距離が足りなかったということ。そして、気づいたら地面に横たわっていて、レベッカが僕の顔をのぞき込んでいた、ということだけだ。

「たいへん、ジャッキー！」レベッカは脅えた声で言った。「怪我してるわ！ 動いちゃだめよ。父さんと呼んでくるからね！」

頭に手をやってみると、手が血だらけになったので、ひどく切れているのが分かった。でも待つしかなかった。そこへ父さんが現われ、僕を抱き上げると急いで車に乗せた。

父さんは舗装されていないでこぼこ道を思いっきり飛ばしながら、農家でも納屋でも、とにかくどこかで人を見つけて、医者のある所を教えてもらおうと必死だった。レベッカと僕は、後ろの座席に黙って座っていた。顔や首筋に血がしたたり落ちてくるのが感じられた。僕は怖かった。三人とも不安だった。

やがて、道路の脇にある一軒の小さな家にたどり着くと、父さんはもう一度僕を抱き上げて、家の中に入った。長い白衣を着た男の

人が現われ、一言二言話し声が聞こえた。

「こういうのは初めてなんですが、急がなくては。さあ！ その椅子に座らせてください。」

部屋の中の様子は、前に一度母さんに連れられて行った、歯医者さんの診察室とそっくりで、頭の上に大きなライトがあり、トレイの上にはいろんな種類の小さな器具が並べられていた。部屋の臭いも同じだった。男の人が近づいてきて、にこにこしながら言った。

「坊や、名前は？」

「ジャッキー」と僕は答えた。

「じゃあ、ジャッキー。いいかい、君は頭をちょっと切ってるから、今からおじさんが治してあげよう。少し時間がかかるかも知れないけれどね。」そう言ってその人は引き出しを開けると、ガムの箱を取り出した。「このガムが見えるかい？ もし治療が済むまで、じっとして泣かずにいたら、これを君にあげよう。どうだい？」

当時は戦時中だったので、ガムなんてもうどれくらい長い間口にしていなかったことだろう。「分かった。そうする」僕は何か変な答え方で返事をした。

その後何がどうなったかは、さっぱり分からない。引っ張ったり、押ししたり、締め付けたり。途中で一度だけ泣きそうになったけれど、ふと見ると父さんが僕をじっと見つめていた。なぜか分からないけれど、父さんは声には出さなかったのに、僕には何となくこんなふうになっているように思えた。「がんばれ！ お前ならできるはずだ！ もう少しの辛抱だぞ！がんばれ！がんばれよ！」それにももちろん、そのトレイの上に置いてあるチューインガムの箱も、時々ちらっと横目で見ていた。

ようやくお医者さんは手を止めた。そして背筋を伸ばすと、テーブルの上に器具を戻した。その顔は汗だくだった。白衣にもあちこちに汗の跡があって、左右の袖はところどころ血がにじんでいた。

「終わったぞ！ ああ、やれやれ…」父さんの方に向き直りながら、お医者さんの声はだんだん小さくなって消えた。

それからまた僕と目が合った。僕が目がガムの箱に釘付けになっているのに気がついて、お医者さんはこう言った。「ああ、そうだったね。ごめんよ。忘れるところだった。」そう言って、僕にガムの箱を手渡した。その時、両手で僕の手をぎゅっと握ってくれたような気がした。

父さんが来て僕を抱き上げ、そっと椅子から下ろしてくれた。父さんは、お医者さんと2、3分ほど言葉を交わしてから、頭を包帯でぐるぐる巻きにされた僕を連れて車に戻った。キャンプ場までの帰り道、父さんがゆっくり車を運転する間、僕はガムの箱をしっかりと握り締めていた。まるで金塊でも手にしているように。

2 ほら、君にプレゼントだよ！

どんな土地にも、その地ならではの特色というものがあると思う。他に例を見ない、その土地特有の何かが。スクラントンにも同じことが言える。もっとも、これは今から百年ほど前、20世紀初頭の話である。当時この街は、南はウエストバージニア州から北はペンシルバニア州の北東部に及ぶ、アレゲーニー山脈を貫く炭田地帯のど真ん中に位置していた。その上鉄道が走っていたのだ。ニューヨーク、ピッツバーグ、シカゴ、フィラデルフィア、モントリオールといった大都市に囲まれたスクラントンは、活気に満ち溢れ、その全盛期には実に四本もの鉄道が通っていた。しかし、それは古き良き時代の話である。石炭が掘り尽くされ、その後鉄道が廃止になると、街は次第にさびれていった。だが、もちろん全てが衰退の一途を辿った訳ではない。皮肉なことに、そういった変化によってむしろ改善された点もある。住みやすい街に生まれ変わったのだ。小さくて静かな「親しみやすい街」に。

僕が少年時代を過ごした1940年代、うちは典型的な家庭だったと思う。僕たちは中流階級、いや、中の下くらいだったろうか。当時の経済状況は町にあまりお金をもたらさなかった。人々は慎ましく暮らしていた。

父さんは、そんな中でも運のいい方だった。食料雑貨商という、まともな安定した職に就いていたからだ。父さんは大手スーパーのA&P社の下で、42年間働いた。

「父さんはな、一日も仕事を休んだことがないんだぞ。」父さん

はよくそう言って自慢していた。「病気になった時もだ。」

実は、厳密に言うと、少し違うのだが。父さんは時々潰瘍に悩まされて、店を早仕舞することがあったのだ。でも、決して店を閉めることはなかったから、確かに父さんは、一日も休まなかったと言える。

さて、毎年クリスマスの時期になると、父さんと母さんはかなり綿密な計画を立てなければならなかったと思われる。僕たちは七人兄弟だったが、父さんと母さんからのプレゼントの他に、兄弟がそれぞれ一人一人に何らかのプレゼントを渡すという、不文律のようなものがうちにはあった。だから一人一人は多さんプレゼントをうけとることができた。一つではなく、いくつものである。ここで、僕がとりわけ鮮明に覚えている、ある年のクリスマスについてお話ししよう。

クリスマスが三週間後に迫った12月の初め頃、父さんと母さんはそろそろ買い物に出かけようと思い立った。そこである昼下がり、僕たちはバスに乗り込んで、ちょっと街まで出かけた。

繁華街に着くと、父さんは僕の方を見て言った。「じゃあ、お前は母さんについていきなさい。少し買い物があるそうだから、荷物持ちを手伝ってあげてくれ。」その頃の僕には分からなかったが、後になって、父さんがその時どこに行こうとしていたかが分かった。銀行へお金を引き出しに行ったのだ。

母さんと一緒に最初に向かった場所を、今も覚えている。地下にあるグローブ・ストアだ。階段を下りていくと、大勢の子供たちが列を作って、サンタと話をする順番を待っていた。もういい加減待ちくたびれた頃に、ようやく僕の番が来た。僕が歩いていくと、サンタはにっこりして、膝の上に僕を乗せた。

「やあ、よく来たね、坊や。名前は何ていうのかな？」サンタが尋ねた。

「僕、ジャッキーっていうんだ。」僕はそう答えながら、サンタの膝の上に座らせてもらった。みんなの注目の的になったような得意げな気分だった。

「ジャッキーか！ いい名前だね。じゃあ聞くよ、ジャッキー。君はクリスマスに何が欲しい？」

「赤いワゴン車」と僕は答えた。大きくて強くて人のいいサンタのような人なら、こんなプレゼントは朝飯前だろうと思った。

「よし、分かった」とサンタは言った。それから母親たちの方を見ながら、大きな声でこう言った。「ジャッキーは、赤いワゴン車が欲しいんだな？ まあ、考えておくでしょう。ジャッキー、来てくれてありがとう。いいかい、良い子にしてるんだぞ！ サンタは良い子たちが好きだからね。」

僕はすぐに、母さんのそばに戻った。

「サンタさんに言われたこと聞いていた？」母さんは僕に念を押した。「良い子にしてなさいって言われたでしょ。良い子にしていますって、サンタさんに約束した？」

「あっ、忘れちゃった」僕は言った。「僕、サンタさんに言ってくるよ。」

「その必要はないわ」と母さんは言った。「サンタさんは何でもご存知なのよ。あなたが良い子にしていれば、サンタさんにはちゃんと分かるの。」

その時から、僕がどれくらい良い子になったかは想像がつくだろう。僕だけではなかった。兄弟そろって良い子になった。歩道の雪かきをしたり、夕食後の皿洗いをしたり、シャベルでかまどに石炭をくべたり、その灰をかき出したり… 僕たちは何でもした。みんなの心の奥に、いつもこの言葉があったからだ。

「いいこと、サンタさんは何でもご存知なのよ！ あなたが良い子にしていれば、サンタさんにはちゃんと分かるの。」

何はともあれ、時は瞬く間に過ぎた。もっとも、子供にとってはずいぶんじれったかったことだろう。ネティビティ教会での真夜中のミサは、盛大なものだった。聖歌隊員は総出演で、教会には溢れんばかりの人が集まった。11時半を過ぎると、もう中には入れないのだ、絶対に！ それに、僕は一列にきちんと並んで教会に入っていくのが気に入っていた。司祭の補佐役の“侍者”を務める少年たちが大勢で列を成し、その一人一人が、太くて背の高いろうそくを持っていく。「真っ直ぐに持つんですよ」シスター・ヘレンは僕たちによくそう言った。「法衣が蠟ろうだらけになったら困るでしょう。」

僕はいつも、真夜中のミサの説教にはあまり夢中になれなかったが、ファロン神父の説教だけは例外だった。他の司祭の説教は、難しくてよく分からなかったのだ。お察しの通り、その年のクリスマスは、ファロン神父の番だったのだ。あの説教はいつまでも忘れない。

「昔々、一人の若い男が森の中を歩いていました。しばらく歩いていくと、広い野原が目の前にぱっとあらわれ、何と、その野原の向こうに高さが30メートルほどもある壮大な絶壁がそそり立っていました。（ああ・・・）とその男は思いました。（こだまがよく響くだろうな。一度試してみよう！）そこで男は叫びました。『おまえなんか大嫌いだ！』するとすぐに、思ったとおりこだまが返ってきました。『おまえなんか大嫌いだ！』そのあとも男は歩きつづけました。

あくる日、男はまた同じ道を歩いて帰ることにしました。昨日の絶壁を再び見て、もう一度試してみようと考えました。しかし今度は大きく、はっきりした声で、こう叫んだのです。『私はあなたを愛しています！』」

ファロン神父がこの後何と言われたかは、はっきり覚えていない。実は今思い返してみると、何も言われなかったように思う。ファロ

ン神父はただ、集まった信者たちに軽く一礼しただけで、席に着かれたのだ。教会の中は、ピンが落ちてでも聞こえるくらい、しーんと静まり返っていた。

奉献の時間になると、少し歩き回ることができて嬉しかった。僕たちが祭瓶を持って行って司祭に手渡すと、司祭は祭瓶の水とぶどう酒を聖杯（カリス）に注ぎ入れるのだ。これは楽しかった。そして、“聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな”も良かった。ベルを鳴らすことができたからだ。でもその後、“神の子羊”まで待つ時間が長かった。僕は、何とか床の上に転げ落ちないようにと必死だった。眠くてしようがなかったのだ。それでも聖体拝領の時間まで我慢すれば、その後は実に素晴らしかった。僕たちはそれぞれ一人の司祭に付いて行って、信者たちのあごの下に聖体皿を当てる役をした。時々、司祭は“ホスチア”と呼ばれるパンを信者の口に入れるのに苦労していた。中には、舌をしっかりと前に出さない人がいて、何とかしてホスチアを口の中に放り込んでやらねばならないのだ（司祭たちは、こういうことを練習する機会はたくさんあるので、ほとんど失敗することはなかった）。あるいはまた、舌を突き出し過ぎて、司祭の指をなめてしまう人もあった。これには司祭も参っていたのではないかと思う。

ミサが終わると、僕の頭は家に帰ることだけでいっぱいだった。家とプレゼントのことだけで。母さんはいつも、温かい“ホット・クロス・バン”という十字飾りのついたパンと、“エッグ・ノッグ”と呼ばれる卵に砂糖とミルクを加えた飲み物を用意しておいてくれた。実を言うと、母さんはこのエッグ・ノッグに、ブランデーか何かを少し加えていたらしい。そうでもしなければ、僕たちはツリーの下にあるプレゼントのことが気になって、誰一人眠れなかつたらう。

ともかく次の朝早く、僕たちはベッドから飛び起きて、ツリーめ

がけてダッシュした。果たして僕の期待どおり、ツリーの下に真っ赤なワゴン車が置いてあった。サンタは絶対に約束を守ってくれるのだ。

その頃の僕はまだ幼すぎて、クリスマスを祝う理由についてあまり深く考えたことがなかった。もちろん、イエスの誕生日を祝っている、ということくらいは知っていた。シスター・ヘレンが、耳にたこができるくらい僕たちに言って聞かせたからだ。それに、祭壇の両側には美しいキリスト降誕の場面が再現してあったし、その上の高い所には、すてきな天使の人形がワイヤーに留めてあり、「いと高き所にホザンナ！」という聖書の一節を書いた看板が掲げられていた。考えてみると、だいたいあの数々のプレゼントがどこから来るものかも、僕はあまりよく分かっていなかったのだ。つまり、どうやって支払っていたのかということだ。父さんは食料雑貨商で、銀行にお金を持っている。それ以外、考えたことがなかった。でも今になって振り返ってみると、もっともっと深い意味があったことに気づく。一つには、僕の両親が特に意図したことではないと思うが、うちの家庭は何となくいつも思いやりの精神に満ちていて、それがやがて僕たち一人一人の心の中に根づいたようだ。つまり、贈り物に込められた家族への思いなのだが、分かってもらえるだろうか。口に出すのはいつも、「メリークリスマス！」とか、「ほら、君にプレゼントだよ！」とかいった言葉だけだったが、そんな短い言葉の中に、いつもたくさんの意味が込められていた。そういう言葉は心に染みるのだ。

あれから何年か経って、弟のティミーは、ROTC（予備役将校訓練部隊）の隊員として大学を卒業した時、自分が進むべき道は陸軍への入隊であると決意した。僕は今でも、ティミーが旅立つ日の母さんの言葉を覚えている。「クリスマスに家に帰してもらえるか聞いてみるんですよ。」そして案の定、ティミーは運が良かったのか、

入隊して一年にも満たないというのに、クリスマスにはちゃんと家に帰ってこられたのだ。

最近の軍人の月給がいくらなのかはつきりとは分からないが、昔は今よりもだいぶ少なかったと思う。それでもとにかく、ティミーは家に帰ってくるなり一目散に街に出かけていき、クリスマス・プレゼントを買い始めた。しかも両親にだけではない。家族全員にプレゼントを買ったのだ。それからどうしただろう。あのティミーときたら、クリスマス・イブに徹夜でプレゼントを包んだのだ。うそじゃない。僕がクリスマスの朝早くに目を覚ますと、ティミーはクリスマス・ツリーの近くで、最後のプレゼントを包み終わり、それぞれの名前を書いた小さなシールを貼り付けているところだった。あの時のティミーの顔と言ったら！ 本当に一睡もしていないというのに、誰よりも幸せそうな顔をしていた。

今では家族のみんなも年を重ね、それぞれ別々の道を歩んでいる。それでも、クリスマスには、僕たちは今でも、プレゼントを交換し合う習慣を守っている。小包を送ったり、電話をかけたり、直接手渡したり、と形は様々だけれど。これは本当に素晴らしいことだと思う。僕にとっては、何物に代えることができない宝物だ。

3 口先だけ

そんなに長くはかからないはずだった。すぐその食料雑貨店までお使いに行って、イーストと砂糖と、バターを少し買ってくればよかったのだ。おばあちゃんがパンを焼きたいと言うので、その材料を買いに行かされたのだった。

夏だったので、7時半でもまだ外は明るかった。どっちにしても、僕はもう暗闇を怖がるような年頃ではなかった。長いしっぽの生えた悪魔が、三つ又を持って出てくるような類いの話は、もう卒業していた。屋根裏部屋の階段を、電灯のスイッチに手が届くまでおそるおそる抜き足差し足で上っていたこととか、電灯がパッとついた瞬間にホッとため息をもらしていたことなんて、今ではもう笑い飛ばせる思い出になっていた。そんなことは、意気地なしのすることだったから。

雑貨店のウォルシュさんは、品物の重さを量り、三つの小さな包みに分けて包装すると、お勘定をしてからカウンター越しに手渡ししてくれた。

「全部で52セントだよ、坊や」ウォルシュさんは、親しみのこもった声でそう言った。

僕は、手にお金をきっちり用意して持っていた。25セント硬貨2枚と、1セント硬貨2枚。（おばあちゃんは、こういうことに関してはいつもとても細かい人だった。）

「どうもありがとう」ウォルシュさんは、満面の笑顔でこう言った。「君のおばあちゃんは、頭が冴えてるなあ。年寄りだからって

馬鹿にできないね。おばあちゃんによろしくな。」

「はい」僕はそう答えると、戸口の方に向かった。

たった4ブロックの道のりを、再びおばあちゃんの家に向かって歩き出した時、遠くの方からこっちに向かって走ってくる男の姿が見えたような気がした。初めのうちは大して気に留めてはいなかったのだが、男が近づいてくると、なぜこの人は走っているのだろうと気になり出した。やがて僕のそばまで来ると、男はスピードを落とし、そのうち歩き始めた。僕はまだ不可解な気持ちで、男をじっと見つめた。男が通り過ぎる時、僕はその顔をちらっと見た。まだ若い、おそらく25か26歳くらいの、背が高く、ハンサムな人で、コートの下にスーツとネクタイという、なかなかきちっとした服装をしていた。その時は、まだ夏だというのにコートを着ていることを、特に変だと思わなかった。今だったら、こんな暖かい季節に長いコートをきているなんておかしいなと思えるんだけど。さっき言ったように、とにかく、男が通り過ぎる時、僕はその顔をじっくり見たとおもったが、その頃もう辺りは暗くなっていたので、思ったほどそんなにはっきりとはみえてなかったのかもしれない。男はすれ違いざまに僕に微笑みかけたが、僕は立ち止まらずにそのまま家に向かって通りを歩き続けた。でも、なんとなく、好奇心からかあるいは何かいやな予感がしたのか、僕は歩みをゆるめて後ろを振り返った。すると、男は交差点の所に立ったまま、僕の方を見ていたのだ。まもなく、男は僕の方に向かって歩き始めた。何か話があるのだと思って、僕はその場に立ち止まったまま待っていた。近くまで来ると、男は何か言いたいことがあるのだと言うように、人差し指を立てて見せた。

「悪いけどね、坊や」と男は言った。「オマリーの店がどこにあるか教えてくれないかな？ オマリーっていうバーなんだけど、知ってるかな？ この辺りには詳しくないんでね。」

「うん、知ってるよ」僕は親切にしてあげようと思ってそう答えた。「すぐそこだよ。アルブライト通りっていう、あそこに見える大通りに向かって歩いて行って、ウォルシュさんの雑貨店まで来たら左に曲がるんだ。その通り沿いの右手にあるよ。」

男はまたにっこりすると、少し近寄ってきた。「ねえ坊や、この辺りにはかなり詳しそうだね！」

「うん」と僕は答えた。「おばあちゃんがここに住んでるんだ。」僕は後ろの方向を指差しながら言った。「すぐそこだよ！」

「へえ、そうかい？」男はからかうような口調で言った。「それじゃ、君みたいな小さな子が、どうしてこんな暗い時間に外にいるんだい？」

僕はお使いの目的を分かってもらおうと、雑貨店の買い物袋を持ち上げて見せた。「おばあちゃんに頼まれて、買い物をしてきたんだよ。」

「おやおや、こりゃ驚いた！ まるで『赤ずきんちゃん』の…男の子版みたいだね。」そう言いながら、男は少しずつ僕の方ににじり寄ってきた。あまり接近してきたので、僕は少し後ずさりしたほどだった。そして、男は僕の肩に手を置いた。「ねえ、君名前はなんていうの？ 教えてくれるかな？」

本当は名前はおろか、何も教えたくない気分だった。でも答えないと失礼だと思ったし、あまりにもさつきいてきたので、僕は答えた。「ジャックっていうんだ。」

「ジャックか！ へえ、そりゃいい名前だ！ 何だか童話を思い出すね。えっと、何て言ったっけ？ ああ、そう、『ジャックと豆の木』だったよな？ そうそう、思い出した。『アーサー王の時代に、人里離れたある田舎の村で、貧しい女の人が小さな家で暮らしていました…』ごめん、その後は思い出せないや。ずっと昔に聞いた話だからね。でもあの豆の話は忘れられないね。それに牛もね。」

そう、牛だよ！ 牛は忘れちゃいけないな。」

男は話をしている間、片手 — 確か左手だった — で僕の肩をしっかりと掴み、もう一方の手で、僕の胸の辺りをゆっくり撫でた。男は何か言い続けていたが、何を言っていたかはっきり思い出せない。僕はだんだん怖くて不安になってきたのだ。男は確か「元気な坊や、元気な坊や、母さんの牛と取り換えっこ」とか何とか言っていたと思う。しばらくすると、男の手が僕のお腹の辺りまで下りてきて、またゆっくり撫で始めた。もうその頃には、僕は氷の固まりみたいに血の気が引いて、その場から動けなくなり、声を出して助けを求めることさえ思いつかなくなっていた。

ちょうどその頃、おばあちゃんの家の方から、こちらに向かって歩いてくるもう一つの人影が見えた。その人が近づいてくると、男は僕の体から手を離して姿勢を正し、まるで僕と親しげにおしゃべりをしていたかのように見せかけた。

さて、なぜその時僕は、男のもとから逃げ出すなり、何か声を出すなりしなかったのか、それは自分でも分からない。確かに、そうすべき理由が十分にあったはずだ。なのに僕は、まるで頭が空っぽの案山子みたいにその場に突っ立っていた。人影が通り過ぎ、しばらくすると、男はまた僕の肩に手を置いた。また同じことが始まると思ったちょうどその時、今通り過ぎたばかりの男の人が、交差点の手前で立ち止まっているのに気がついた。それからその人は振り返り、僕たちが立っている方をじっと見てから、くるっときびすを返すと、こちらの方に勢いよく歩いてきたのだ。僕を捕まえていた男には、それだけで十分だった。男は突然ものすごい勢いでその場を離れると、通りの少し先に、僕たちが立っていた場所に対して垂直に延びた路地に姿を消した。助けにきてくれた男の人は、僕に近づくと腰をかがめ、いろいろと質問をし始めた。

「大丈夫かい？ あいつに何もされなかった？ 何があったの？」